

『涅槃經』(迦葉菩薩品)に言わく、いかんが名づけて「聞不具足」とする。如来の所説は十二部經なり。ただ六部を信じて、未だ六部を信ぜず。このゆえに名づけて「聞不具足」とす。またこの六部の經を受持すといえども、読誦に能わずして他のために解説するは、利益するところなけん。このゆえに名づけて「聞不具足」とす。またこの六部の經を受け已りて、議論のためのゆえに、勝他のためのゆえに、利養のためのゆえに、諸有のためのゆえに、持読誦説せん。このゆえに名づけて「聞不具足」とす、とのたまえり。

『教行信証』信巻 真宗聖典二四〇頁

第7組 廣隆寺住職

廣瀬 智隆

Text by Tomotaka Hirose

## 開教百五十年の北海道

2年後の2019年、北海道教区は「開教百五十年」を迎えます。今から50年前(1967年)、当時の宗門を振り返りますと、同朋会運動の第2次5カ年計画として全国に教区教化委員会が設置され、更なる展開が打ち出されたその矢先、11月に難波別院輪番差別事件が起こっています。そして「開教百年」を迎えた1969年4月には「開申」事件が起こり、6月には「靖国神社法案」国会提出、それに先立ち3月に東西本願寺反対声明。8月には差別事件第1回糾弾会で《宗門の差別体質が厳しく問われる》と記されています。内外から宗門の体質が問われ始めた激動の最中、『東本願寺北海道開教百年史』によると、7月の記念法要には、「京都本山より御門跡、御裏方、新門様のお三方を招待、・・・」、24日午後の記念式典は中島スポーツセンターには門徒1万人が集い、北海道教区を挙げて記念事業が行われていたことが記されています。その4年後の1973年には、親鸞聖人誕生八百年、立教開宗七百五十年慶讃法要。「生まれた意義と生きる喜びを見つけよう」のテーマのもと厳修され、また第3次5カ年計画の新たな施策として各組に教化委員会が設置されました。宗門の歩みを顧みつつ「開宗」と「開教」という言葉を思う時、本当に「開かれる」とはどのようなことであり、その意味するところは何であろうかと改めて深く問われるところ

です。  
当寺においても本年6月に宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌法要を厳修し、併せて廣隆寺開創百二十五年・寺号公称百十五年慶讃法要が行われます。幌向の地

は、三笠幌内炭鉱から幌向太に鉄路が敷かれたのが明治 15 (1882)年とありますが、洪水氾濫の多い泥炭地のために、極端に開発は遅れました。寺史に「鬱蒼とした樹木、灌木雑草に覆われた土地を無我夢中で切り開き、粒々辛苦のすえ、一息つき我に返ったとたん、何か心に空しさを感じずるようになっていた。思い出すのは故郷で信仰していた本願念仏の教えで、心の安らぎを得ようにも、寺がない。」とあり、肉親を弔う葬儀法事を行いたいと願っても叶わなかった移住門徒のご苦勞が記されています。そのような非常に厳しい環境にあつて、生活の中に教えを聞く場が欲しいという願いのもとに建てられた江別村選教寺出張所が当寺の始まりです。まさに門徒によって「開かれ」、門徒によって創られ、護られてきたお寺であったのです。

『正像末和讃』国宝本(草稿本)の第一首目の「五十六億七千萬」から三十五首の後に夢告讃の「彌陀の本願信ずべし 本願信ずるひとはみな 攝取不捨の利益にて 無上覺おぼさとりなり」とあり、「この和讃をゆめにおおせをかふりてうれしさにかきつけまいらせたるなり」の言葉が添えられて、「正嘉元年丁巳壬三月一日愚禿親鸞八十五歳書之」と記されています。この時期は善鸞の逆謗事件の直後であり、東国の念仏停止に対処される中で、聖人が非常に感激されてうれしさにかきつけられたと記載されています。聖人は後の日にこの夢告讃を巻頭に掲げ、改めて『正像末和讃』五十八首を編纂されています。

古来、和讃とは「和語讃嘆」の義ですが、聖人の和讃には、そこに「和解讃嘆」と「應和讃嘆」の三義が一致しているといわれます。聖人晩年の著作はその大部分が田舎の人々のために作られたもので、『唯信鈔文意』や『一念多念文意』の最後に添えられている文にその思召しがあることが思われます。

松原祐善先生の『正像末和讃講讃』には「聖人の和讃は佛徳の讃嘆と時機の悲痛・懺悔に徹底して、どこまでも現実の宿業の大地を浮き上がることなく、苦悩の現実を忘却せしめず、却つてこれを凝視して己が双肩に荷負せしめる智慧と大悲を與えてくれるのである。一時的な苦悩の美的解放に終わるのでなく、厳しき歴史的現実を荷負せしめてこそ、眞の宗教的救済といわれねばならない。」と記されております。

これからお迎えする「開教」「立教開宗」法要において、開拓の苦悩の中から念仏の教えに遇いたいと願った先達を憶念し、いまだ眞に聞くことのできぬ我が身を知らされ、そして慶び讃える本願力廻向の自然の大道が聞き開かれんとするところにわが身を据えて勤めてまいりたいものです。